

# 教育長だより



鹿児島県三島村教育委員会  
教育長

室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の学校数が多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会長も務めた。

「三島村は、日本の保健室ですね」と、表現された方がいらっしゃいました。子どもたちが親元を離れ、農山漁村の受け入れ家庭（里親）のもとで暮らし、地域の小中学校に通う「山村留学」。都会育ちの子どもたちにとって、自然に囲まれた生活は、何もなくても新鮮であり、逆に都会よりも刺激的かもしれません。

現代の子どもたちの感受性や五感の劣化、人間関係や対人関係のつまずきは、自然体験・生活体験の不足がその一因ではないかという声は数年来言われ続けられています。その流れは止まる所を知りません。かつての子どもたちは、放課後や休日には野山を駆け回り、昆虫採集をしたり、秘密基地を作ったり、「遊び」を通してさまざまなことを学び、さまざまな「生きる力」を育んできました。自然体験が、五感を刺激し、好奇心を育み、感動する心や豊かな感受性を培ってくれたのですが、今、その環境は求めなければ体験することはできなくなりました。

三島村の「しおかぜ留学」は、平成9年からスタートしました。現在、全児童生徒（約80名）の約4割が全国からの留学生で、約3割が教職員の子どもたち。このことから分かるように、留学生がいるから学校が存続し、教職員とその家族が移住し、子どもたちの数が増えて、学級数や教員数が最小限確保されています。

「子どもが地域にいただけで有難い」そんな思いを小さな村にしているとしみじみと抱きます。子どもたちの声や笑顔はもちろん、その存在そのものによって、大自然のエネルギーが息を吹き返すようです。また、先生方や子どもたちがいなければ成り立たなくなった地域の活動や、貴重な伝統行事も生き続けていきます。

留学生の動機はさまざまですが、本村の場合、不登校傾向の子どもが多くを占めています。町の大きな学校には馴染むことができなくても、村の小さな学校では自分らしさを大いに発揮して休むことなく登校できるのです。子どもたちは、環境さえ整えば自分の体験を通して自分で育つ力を授かっているのではないのでしょうか。

増え続ける不登校や引きこもり、家族の不安やストレス。現代社会の抱える課題は複合的に絡み合い、その固いもつれはかなり強烈です。いじめ、貧困、児童虐待、ゲーム依存、さらには、過疎化・高齢化、地域の繋がりの希薄化、ひとり親家庭の増加など、何重にも絡み合う。

なかなか先に進まない「地方の時代」ですが、最も大きな教育課題の一つである不登校問題と児童生徒減少対策の「山村留学」がうまくマッチングすれば、関係人口の増加、地域活性化など、意外に大きな効果を発揮すると思うのです。「日本の保健室」のような地域が全国各地にあれば、固いもつれも解けていくかも知れません。

学校から里親さんへ小5の留学生が登校していないという連絡がありました。「朝、元気に家を出て行ったのに」心配した里親さんが探しに行くと、通学路でしゃがみ込んでいる彼を見つけました。

好奇心旺盛な少年は、アリの行列を見つけてずっと観察していたのです。その横には村のお年寄りが立っていました。畑に行く途中でしたが、夢中で観察している彼を心配してずっと見守っていたのでした。

